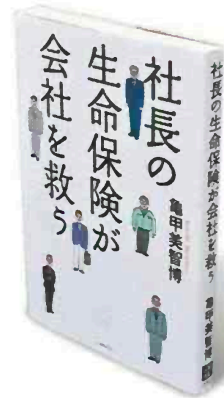


この一冊



日経BP社・1500円(税抜き)

今年初め、喫茶店でたまたま聞こえてきた会話の内容は深刻だった。ご婦人が専門家らしき人物に相談していたのは「零細経営者だった夫が急死し、会社をたたもうとしている」「親戚に借金をしており、返済が難しい」。ご婦人は淡々と話を続けていたが、時折耳に入ってくる内容はいたたまれない気持ちにさせるものだった。

本書「社長が生命保険が会社を救う」(亀甲美智博著)は中小企業のリスクマネジメントにおいて、社長が法人加入する生命保険の重要性を説く。解約返戻率が高い生命保険に加入し、保険料の形で保険会社に会社の資金を蓄積しておけば、内部留保ならぬ「外部留保」として会社の非常時に役立つという主張はなるほどと思わされる。

事業承継の際にも生命保険を活用できるという。社長の勇退時に高額な退職金を支払い、純資産を減らして自社株の評価額を下げ、相続税負担を減らす。高額な退職金の準備のために法人向け保険を使い、勇退時に解約返戻金として受け取るというものだ。損益計算書やキャッシュフロー(現金収支)の両面でメリットがあると説く。

投資家の視点からは理解しづらいオーナー経営者の高額な退職金の背景には、切実な相続対策の側面が大きいことを改めて実感させられる。(菊地毅)

経営者の高額な退職金背景に相続対策も